

研究テーマ：ソーシャルワークモデルの再構築 3	
研究代表者（職氏名）：准教授・大下由美	連絡先 (E-mail 等) : ohshita@pu-hiroshima. ac. jp
共同研究者（職氏名）：教授・加茂陽	

1. 目的

本研究では、家族面接における問題場面の測定法と、ソーシャルワーカーの介入により問題場面が変容した過程を測定する方法を、2者間の具体的なシークエンスの要素のレベルで明示することを目的としている。

2. 方法

クライアントが訴える問題を、具体的な家族の問題場面での典型的なやり取りとして記述させる。その場面を、具体的なシークエンスの要素(意味構成(m)と行為選択(s))に分けてデータを収集する。収集されたトランズアクションの連鎖は、ベールズ (Bales,R.F.) の相互作用過程のカテゴリーでカテゴリー化される(表 1 参照)。カテゴリー化された要素は、図 2 の量的測定によってその構造が、図 3 の 3 次元のグラフによって、カテゴリー化された要素の力動性が測定される。

これらの測定結果から、ソーシャルワーカーは介入ポイントを定め、そのシークエンスの要素の差異化を試みる。差異化されたシークエンスの要素を取り入れた課題を実践してもらうことで、家族の問題場面でのやり取りがどのように変化したかを測定する。課題を実践した過程で、家族の問題場面でのやり取りが、どのようなシークエンスの要素(意味構成と行為選択)の選択に変容したのかを、ベールズの相互作用過程のカテゴリーを用いてカテゴリー化する。問題場面の測定と同様、量的測定、力動性の測定が行われ、両者の比較によって、家族の問題場面の変容とともに、介入の効果が測定される。

3. 結果

①要素のカテゴリー化

夫婦間の問題場面で展開しているシークエンスの要素は、表 1 のように収集された。それぞれの要素は、アルファベットと数字で標記されるカテゴリーに分類される。この記号番号は、ベールズの相互作用過程のカテゴリーの記号番号と一致している。

	トランズアクションの連鎖	要素のカテゴリー
X 1 s	子どもがめそめそして困っているのよ。何かいい方法はないかしら	C 7 ①
Y 1 m	Xは情報が必要なようだ	C 7 ②
Y 2 s	例えば、ひどく叱らないやり方をしているようだよ	B 6 ③
X 2 m	Yは参考になる例を教えてくれた	B 6 ④
X 3 s	なるほど	A 3 ⑤
Y 3 m	Xは理解した	A3 ⑥
Y 4 s	そうすればうまく行くよ。すぐ実行してみてはどう？	B 4 ⑦
X 4 m	Yは少し押し付けがましい	D12 ⑧
X 5 s	ちょっと無理だと思う	D12 ⑨
Y 5 m	Xは状況を十分理解しておらず、反対している	D12 ⑩
Y 6 s	やってみなきゃわからないだろ	D12 ⑪
X 6 m	Yは押し付けている	D12 ⑫
X 7 s	やったってうまく行かないわよ	D12 ⑬
Y 7 m	Xは感情的に反発している	D12 ⑭
Y 8 s	もう少し冷静に考えてみるよ	D12

表 1 問題場面のトランズアクション過程の要素

②量的測定と力動性の測定

表 1 に示されたデータを、図 2 の量的測定図に記入し、2つの尺度の 4つの領域、およびその下位項目に分類され、構造的長が測定される。上記表 1 の問題場面のトランズアクション過程は、D12 にカテゴリー化される要素を多く含んだトランズアクション過程と言える。

情緒性、社会性尺度	問題解決尺度
A. 肯定的反応	B. 問題解決の試み
1 Shows solidarity	4 Gives direction Y 4 s
2 Shows tension release	5 Gives opinion
3 Agrees	6 Gives orientation
X 3 s Y 3 m	Y 2 s X 2 m
D. 否定的反応	C. 質問
10 Disagrees	7 Asks for orientation
	X 1 s Y 1 m
11 Shows tension	8 Asks for opinion
12 Shows antagonism	9 Asks for direction
X 4 m	
X 5 s Y 5 m	
Y 6 s X 6 m	
X 7 s Y 7 m	
Y 8 s	

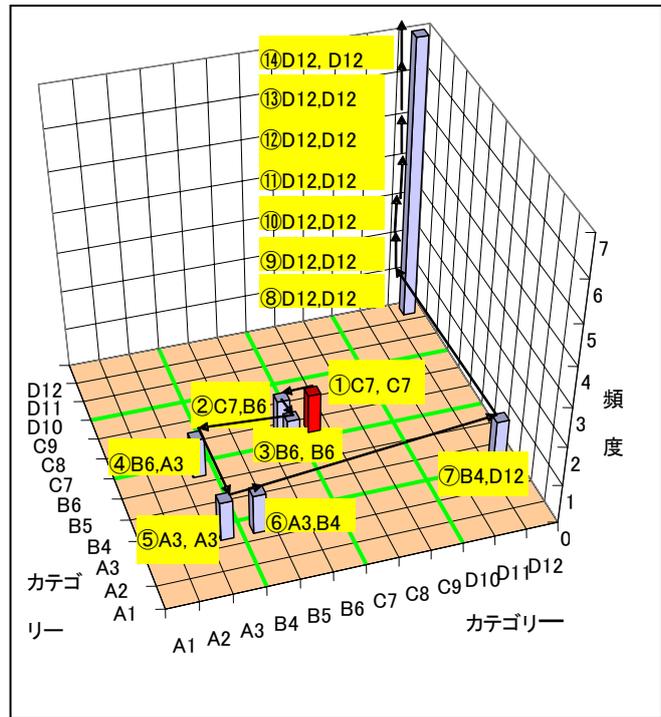


図 1 介入前のシークエンスの要素の量的測定図⁽²⁾ 図 2 介入前のシークエンスの要素の力動性の測定図⁽²⁾

次に、同様のカテゴリー化された要素を用いて、力動性の測定を行う。ここでは、表 1 に示された丸数字 ①～⑭を座標とする 3次元でグラフ化する(図 2)。図 2 の⑧～⑭は、同じ座標が積み重なっており、他の座標を選択する力学が展開していない。この⑧の座標に至るまでの座標において、他のカテゴリーに分類可能な要素を選択することが可能になれば、⑧～⑭の過程も変容されることが予測される。

4. 考察・まとめ

本研究では、家族成員間の問題場面の生成構造とその力学の測定を、具体的な場面の意味構成と行為選択の要素に分け、それらをカテゴリー化することで実現した。上記と同様の方法が、介入後のシークエンスの要素に対しても実施されることで、介入の効果が測定される。しかし、本研究の中心的部分である要素のカテゴリー化の作業は十分蓄積されているとは言えないため、カテゴリー化の作業を客観的に行うための研究は継続していく必要がある。

注(1) Bales, R.F (1950). *Interaction Process Analysis: A Method for the Study of Small Groups*. Cambridge, Mass: Addison-Wesley Press, Inc. また、シークエンスの各要素のカテゴリー化は、Bales, *op, cit.*, pp.85-99、および Appendix: Definitions of the Categories pp.177-195. を参照した。

(2) 加茂陽・大下由美 「エヴィデンス・ベイスド・ソーシャルワークの特質—ナラティブ・アプローチとかわらせて—」『ソーシャルワーク研究』 Vol.34, No.1, 2008年、39-46頁に初出の図である。